めた鶴を千羽鶴としてひとつに繋ぐことは、全校の心もひとつになったように感じたという。そして、もうひとつの活動は各クラスで東日本への応援メッセージビデオを作りである。学級での話し合いを重ね、応援歌やメッセージをビデオにおさめた。ボランティア委員会の児童の募金募集等の呼び掛けも行われた。児童達の思いを込めた千羽鶴とビデオ、募金などは、現地の小学校へと届けていただき、お礼の手紙が返ってくるなど、心の交流をはかることができた。

また、今年度からは、児童の主体的な児童集会の運営を、ということで、教室から体育館への移動も運営委員や代表委員が引率した。放送設備の準備等も児童の手で行われた。司会進行のセリフも暗記し、全校児童の顔を見ながら語りかけることもできるようになった。自治力の高まりは、確かにみられ、それと比例した児童の達成感がみられた。自分たちのアイディアからスタートし、自分たちの手で創り上げた児童集会は、数を重ねていくにつれ、内容、児童の表情、共に充実した。しかし、このような自治力を尊重する教育活動には、思考錯誤や情報収集、内容検討の話し合いなどが必要なため、多大な時間の確保が必要になってくる。現状では、休み時間を返上しての時間確保であるため、児童への負担が気にかかる。

（２）色別活動

本校の色別活動は、６色から成り、各色６班編成、計３６班に分かれて活動している。色別活動で目指す自治力は、運動会で発揮された。応援アピールのセリフや振り付けでは創造的な力、綱引きでは、チームで育んだチームワークが競われる。月１度の色別遊びは、４５分間確保された水曜日の昼休みに行われる。その週の月曜日は、５・６年の高学年リーダーが、全校児童が楽しめるような内容、ルールについて話し合っている。当日の運営も６年生の班長を中心とした高学年が進める。もちろん、高学年はリーダーとしての自覚が芽生え、他の学年の思いにも寄り添ったルールにも工夫が光る。低学年の児童は、高学年のリーダーのアイディアや優しさで思いっきり遊びを楽しんでいる。異年齢の集団の中、顔と名前を自然と覚え、交友関係を広げることができた。一方、

遊びの内容がマンネリ化し、創造的な活動になるよう助言することの重要性を感じた。また、色別活動を行うことでどんな力をつけたいのか、各学年の発達段階に応じた明確なめあてを設定することも重要であると考えた。

（３）委員会

５、６年生児童からなる９つの委員会では、各委員会の話し合いによって自分たちの学校を自分たちの力でよりよくしていこうという活動がなされている。

また、定期的に開かれている代表委員会では、各委員会の委員長と３年生以上（後期からは２年生も参加）の代表委員が昼休みに集まり、学校全体で取り組む生活目標について話し合っている。１学期は、生活目標を「友だちを大切にする」とし、具体的な学級目標を立てた。２学期は、「おまかせいしべっこ」の「お」の「大きな声であいさつをしよう」を学校の生活目標として取り組み、３学期は「おまかせいしべっこ」の「し」の「しずかにろうかは右側を」を学校の生活目標にし、学級の具体的目標を決めて取り組んできた。

代表委員会では児童一人ひとりの意見が学校生活に反映され、児童が主体的によりよい学校作りを目指す場となっている。しかしながら、話し合う時間が昼休みということもあって、来るのを忘れてしまう児童がいることや、低学年児童に自治的な活動をどのように伝えていけばよいかという課題もある。

（４）クラブ

本校のクラブ活動は、児童による自治的な活動、主体的な活動をねらいとして、６年生の児童に自らクラブを考えさせ、一から立ち上げさせている。

まず、６年生の児童に、どんなクラブを創りたいかを考えさせた。どのような活動をするクラブなのか、年間を通した活動計画はどのようなものか、本当にうまく異学年交流ができる内容であるのか等を思考の軸として考えさせた。そして、学年で集まり、おのおのが考えてきたクラブを出し合った。話し合いの中で、活動場所等をすり合わせながら活動の精選、類似活動の統合をし、今年度は９つのクラブが誕生した。その後、６年生は自分の希望するクラブに入り、そのメンバーで原案を元に活動内容を練り上げた。自らが考えたアイデアや工夫がクラブ活動に取り入れられていくことで、児童は大きな達成感と責任感を持ちながら活動計画の作成に取り組んでいた。その後、児童集会でクラブをＰＲし、